

Part 2 Method

生徒のモチベーションを高める英語指導ストラテジー

—モチベーション・ストラテジーの理論と実践

生徒のやる気を引き出すために、日々の授業の中でどのような工夫ができるのか、ご紹介いただきます。

監修 Zoltán Dörnyei
(ゾルタン・ドルニエイ) 先生

英国ノッティンガム大学教授。専門は、応用言語学。外国語学習における動機づけ研究の第一人者。著書に *Motivational Strategies in the Language Classroom* や *Motivating Learners, Motivating Teachers* (Cambridge University Press) など多数。



執筆 和田 玲 先生

順天中学校・高等学校教諭。ロンドン大学クイーンメアリー修士課程修了（応用言語学 with Distinction）。「高校英語授業におけるモチベーション・ストラテジーの効果」に関する教室実証研究論文を執筆。著書に「アクティブ・リーディング」シリーズ（アルク）など。元テコンドー全日本チャンピオン、世界大会メダリストでもある。



なぜ今、動機づけが必要か？

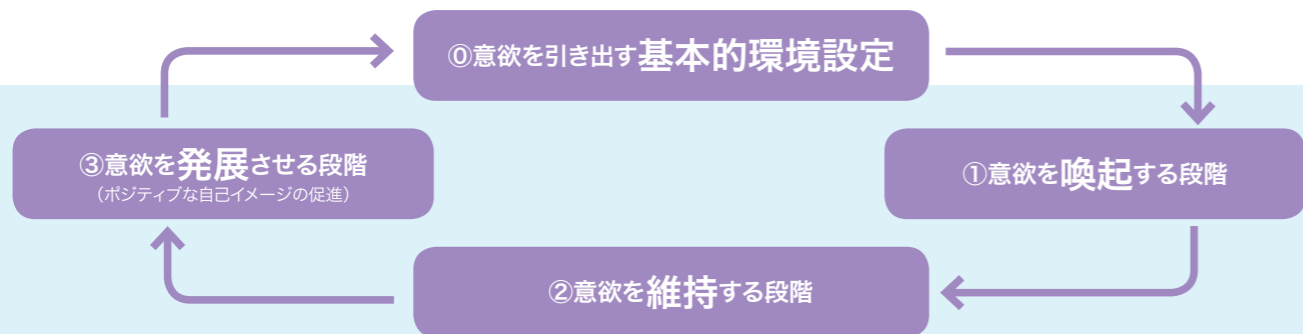
近年、優れた指導方法や活動アイデアがたくさん提案されています。しかし、「生徒が授業に乗ってこない」と頭を抱える先生は少なくありません。毎年実施される文部科学省の英語力調査によると、高3生・約70万人のうち、「英語学習が好きでない」と答えた生徒が半数以上にも上っています。また、同調査参加者の85%の英語発信力はCEFR A1（最初級者）レベルにとどまり、家庭学習時間が少ないことも明らかとなっています。有効な指導法の実践と同時に、生徒の学習意欲を高める動機づけのアプローチが今こそ必要です。

モチベーション・ストラテジーとは？

「生徒の意欲を刺激し、引き出す指導技術」のことをモチベーション・ストラテジー（以下MS）と呼びます。MSは多様で有効な技術ですが、どんなクラスでも等し

く効果を発揮するとは限りません。意欲は、時と場面に応じて変化するからです。従って、MSの効果を最大限に引き出すには、意欲の流動的性質に基づくMSの理論的枠組みを理解し、状況に適した指導法を取り入れることが大切です。

動機づけ研究の世界的権威ゾルタン・ドルニエイ先生が体系化したMSの理論的枠組みによると、意欲には以下の発達段階があります。①基本的環境設定、①意欲の喚起、②維持、③発展（ポジティブな自己イメージの促進）です。この段階的モデルは、生徒のやる気を引き出す環境基盤を構築し、その上で意欲喚起を図ることの重要性を示唆しています。しかし、一度喚起された意欲は時の経過とともに減退します。従って、生徒が夢中で取り組める活動を仕掛け、意欲を維持することが大切です。また、生徒の取り組みに適切なフィードバックを与え、英語話者としての肯定的イメージを強化することも、次の課題への挑戦意欲を育む上で重要です。以下、各段階ごとに有効なMSの一部を見てみましょう。



①意欲を引き出す基本的環境設定

MSはどんな生徒にも有効な万能薬ではありません。その効果を引き出すためには、以下の条件を十分に満たす必要があります。「適切な教師の振る舞い」、「楽しく支持的な教室ムード」、「規範の浸透と集団凝集性の強化」です。

Strategy 1

適切な教師の振る舞い

生徒の活発な学習行動を促すには、教師・生徒間の信頼関係構築努力が不可欠です。それには、教師が生徒の成功に期待を寄せ、進歩を支援し、いつでもポジティブに生徒たちを「受容」する姿勢が欠かせません。また、教師の教科や指導への情熱も生徒のやる気に大きな影響を及ぼします。

Methods

- 生徒が成長した姿を信じる（教師の期待度が生徒の学習成果に影響を与えることを指す「ピグマリオン効果」を意識する）
- 生徒の好ましい性質や努力を認識していることを伝える
- 教科愛を示す（いかにその教科が好きか、価値ある教科であるかを表現する）

教室実践例

「受容」することの重要性を知りつつも、やはりどのクラスにも教師が指導しづらい生徒はいるものです。そうした生徒に関しては、ついネガティブな側面ばかりを見てしまいがちで、次第に心的距離は広がっていきます。そのような状態を避けるために、新年度早々、私が実践することは、クラスの全生徒の長所を具体的な場面とともに五つ以上言えるようにすることです（担任クラスの場合には1カ月以内に10個以上）。それができるまでは、決してネガティブなイメージを固定化しないと決意します（もちろん必要な指導は適宜入れます）。そうすると、不思議なことに、上の目標が達成できる頃には、関係づくりに困難を感じていた生徒も含めて、そのクラスの全ての生徒が好きだとはっきり言える自分ができ、クラス全体もポジティブな状態に変化していることが多いのです。ポイントは、「君は価値ある存在だ」「君には独自の力がある」「君は他者に貢献することができる人だ」とはっきり言えるように取り組むことです。

Strategy 2

安心で支持的なクラスムードの構築

英語の授業では、生徒が安心して学習に取り組めるクラスムードが欠かせません。不慣れな言語でやり取りすることを求められる教室には、生徒の言語不安や意欲の減退を引き起こす危険性が大いにあるからです。しかし、クラスに楽しく支持的なムードが浸透していれば、生徒はリスク・テイキングを厭わなくなります。そのようなムードの醸成は、集団の結束性と建設的な集団規範の有無に大きく左右されます。

Methods

- 誤りは言語習得上不可欠な進歩の証であることを強調し、歓迎（許容規範の共有）、リスク・テイキングを奨励する
- 互いを知る機会を増やす
- 共通ゴールを設定し協働を促す（グループ間競争も時に有効）
- クラス・ルールを明確に示す

教室実践例

安心で支持的なクラスムードを浸透させるためには、初めてのグループ作りを慎重に行う必要があります。無作為な班作りは、授業停滞の要因になり得るからです。初めての班決めの際には、生徒たちとグループの在り方についてクラス全体で話し合う時間を設けます。生徒たちには、リーダーに求める資質と班員のあるべき振る舞いについて話し合ってもらいます。出てきた意見を収集し、共通点を多く含む考えをそのクラスのコミュニケーション・ルールとするのです。その後、生徒たちにはリーダーになってもらいたい仲間の名前を数名ずつ紙に書いてもらい、回収。その日はそこで終了。次の授業までに、リーダー候補に選ばれた生徒たちを集め、リーダーを引き受けてもらえるかを尋ねます。次時にグループを組む際、リーダーには班員を迎えに行かせ、班員たちには握手をしながら一言ポジティブな言葉を贈ってもらうようにします（「一緒に最高の班を作ろう」、「貴方についていきます」など）^{※1}。その後は、毎時間、黒板にルールを貼っておき、規範の浸透と集団凝集性の強化を図ります^{※2}。

※1 上記の班作りの方法は、畑中豊先生から教えていただいたやり方です。『英語授業マネジメントハンドブック』（明治図書出版）参照。

※2 クラスルール作りとその重要性に関しては、胡子美由紀先生から多くを学ばせていただきました。『英語授業ルール&活動アイデア35』（明治図書出版）参照。

1 意欲を喚起する段階

全ての生徒が意欲にあふれ、いつでも活発に学習に取り組んでいる理想的なクラスに恵まれることはまれです。カリキュラム内容の多くは、社会で大切だと思われている事柄に照らして構成されており、生徒の興味に基づいて作られたものではないからです。それが、生徒たちに

授業での学習内容に価値を見だしにくくさせている要因ともなっています。従って、教師は、生徒の学習意欲を高める必要があるのです。それには、活動に対する生徒の「成功期待」を高める工夫や、教材内容を生徒の「自己関連性」の高いものにするといった手だてが有効です。

Strategy 3

成功期待を高める

生徒がベストを尽くすのは、自分にはそれが「できる」と信じられるときです。とりわけ、難しい課題に取り組む際には、成功可能性が生徒の活動意欲に影響を与えます。実際に一つを達成することで、生徒の成功期待の幅が広がり、次の課題に挑む意欲も高まります。しかし、課題が簡単すぎると手を抜いたり、やる気を減退させたりすることがあるため、タスクはチャレンジングでありつつ、実現可能な範囲内でデザインすることが大切です。

Methods

- 成功基準を明確に示す
- 準備手順と成功例（モデル）を示す
- 新しい単元を扱う際には、全員がうまく取り組める課題から始め、徐々に要求の高い課題を提示する

教室実践例

新しい単元に入る時には、達成目標項目を全て可視化した1枚のシートを配布します。スピーキング・ライティングテストの際にもルーブリックを配布し、成功基準を明示します。例えば、スピーチ活動では、三つの評価項目を黒板に示し、生徒がその項目に見合うパフォーマンスを効果的に行った際には、その場で黒板にチェックを入れ、評価のプロセスを可視化します。三つの項目とは、Structure（序論、本論、結論）、聴衆からの自然なReaction（「へえ」、「ほお」、「わはは」の数を評価）、聴衆のParticipationを促す工夫（質問、クイズ、実験など）です。こうした活動を行う前には、必ず①準備の手順を示し、②教師や先輩によるモデル提示を行います。これによって、生徒は「自分にもできそうだ」と感じ、成功期待を膨らませて、意欲的に活動へ取り組むようになります。生徒の発表後には、ポジティブなフィードバックを与え、次の課題に向かう挑戦意欲を強化します。同時に、聞き手にも何が聴衆の心を捉えるのかを理解させ、自信を持って準備に臨めるよう仕向けます。

Strategy 4

生徒の自己関連性を引き出す

生徒たちの将来の目標や関心のあるトピックを可能な限り授業や教材に取り入れることは、意欲の喚起に役立ちます。それには、生徒の持つ関心・経験・ニーズを知る手だてが必要です。さまざまな角度から生徒理解に努め、自己関連性を引き出す授業デザインを試みることで、意欲の喚起につながります。

Methods

- 自分を描写するライティング課題を出し、生徒理解に努める
- 文完成型アンケートを行う（「私がハマっていることは…」、「私が怖いのは…」、「人がすべきだと思うことは…」など）
- 生徒が英語に触れる場面や将来の英語使用場面を調査する

教室実践例

ニーズ分析（necessities, lacks, wants）に基づくシラバス作りや教材開発は、生徒の意欲喚起に大きな影響を与えます。高3クラスでニーズ調査を行い、生徒の関心（特に wants に着目した）に沿ったテーマの入試問題を集めてリーディング教材を作り、独自のシラバスに基づいて授業を行ったことがありました。教材は、global issues を概観するような内容となり、環境の問題（エコ商品、エコ改築、絶滅危惧種、エコツアー）から始まり、国際問題（地雷、難民、飢餓、格差）へと発展します。最後は、「世界のためにできること」という卒業プレゼンをゴールに据え、その間にも問題解決に尽力する人物や団体を紹介した英文を読ませていきました。授業では、英文読解に終始せず、概念的葛藤を生み出す発問を投げて理解の深化を図り、世界の問題がわれわれの生活と密接に関係していることを認識させました。この授業は、生徒の内発的動機を強く刺激し、受験直前期にもかかわらず、休憩時間に関連書籍を読みふける生徒や希望進路の変更を本気で相談しにくる生徒を多く産み出したのです。これが、拙書『アクティブ・リーディング Super』（アルク）の原型です。つまり、ニーズ（とりわけ wants）に目を向け、自己関連性を引き出す試みは、意欲あふれる教室作りの第一歩なのです。

2 意欲を維持する段階

意欲が一度喚起されたとしても、それを維持する働き掛けがない場合、意欲は次第に減退します。意欲を維持させるには、興味深いタスクを提示して、生徒主体の学習ムードを促すことが不可欠です。教師が「生徒にイニシアチブを委譲するタイミング」と言い換えてもよいか

もしれません。生徒のengagement（夢中になって取り組む姿勢）を高めるタスクには、いくつかキーとなる要素があります。その要点を押さえたタスクを導入し、協同と自律を促す指導を組み込むとより効果的です。

Strategy 5

興味をそそるタスクを提示する

タスクは、以下の要素を多く含んでいるほど、生徒の積極的参加を促すのに役立ちます。【(1)挑戦的 (2)面白い (3)真新しい (4)興味深い (5)エキゾチック (6)空想的 (7)個人的 (8)競争的 (9)創作的 (10)ユーモア】といった要素です。これらをより多く含むタスクデザインを心掛けましょう。また、授業でタスクを導入する際には、その課題達成がどのような目的と有用性を持つのかを明示することも大切です(task value)。さらに、課題を達成できるよう、適切な取り組み方を示すことも意欲の維持に影響します。

Methods

- 上の10個のキー・エレメントを含むタスクをデザインする
- 目標スキル強化の目的と有用性を明示する
- 取り組み方を明示する（手順・モデル提示、有用な既有知識への気づき促進など）

教室実践例

「夢の商品販売」プレゼン^{※3}が、毎年生徒に好評です。これは、夢の新商品を考案し、それを1分間で魅力的に伝えるテレビCMを作るタスクです（私のクラスでは通常ペアで行います）。このタスクは、視聴者の心をつかむCMに限られた時間でまとめなくてはならないため、とてもチャレンジングです。空想的要素もあり、有形物の創作を通じて、真新しさと興味深さを追求します。また、良い意味で競争的でもあり、プレゼンには自然とユーモアが加えられます。一連の作業に取り組む生徒たちは常に楽しそう。準備時間を無駄遣いする者はなく、はつらつとした協同の姿が見られます。このように、上のキー・エレメントを多く含んだタスクは生徒の活動を活性化し、発表時まで意欲を高い状態に維持します。他にも、修学旅行直後の発話活動で、名所や土産を説明させる際、単に事物を説明せよと指示するのではなく、体調不良で欠席したA君とB子さんのための土産を選ぶなどと「個人的要素」（personalisation）を加えるだけで議論は活発になります。

Strategy 6

協同を促す

協同的な学びは、生徒同士のインタラクションと互いの学びへの貢献を増幅します。良い意味での相互依存は、支持的な集団ムードと個々の責任感を高め、個性的な貢献が見られるようになります。他の学習形態に比べて不安やストレスが和らぎ、学ぶ意欲が持続します。

協同的な学びには、ゴール達成に他者との協力を要する課題を設定し、班員全員の役割・責任分担を明確にすることがポイントとなります。例えばシグソーリーディング^{※4}は、課題解決に向けて班員の責任と協力を促します。グループ内討議の前に、同じ役割を担当する者同士による助け合いの時間を設ければ、英語が苦手な生徒もグループ内での任務を果たすことができます。自己効力感を高め、学習意欲の維持・向上にもつながります。

Strategy 7

自律を促す

意欲の前提は、選択の自由にあります^{※5}。選択には責任が伴います。故に、生徒の選択を反映した授業の実施（生徒の関心に基づく授業計画、指導展開、教材選びなど）は、彼らの自律的行動を促します。自律型学習スタイルの導入に不安を感じる場合は、生徒の自己決定場面を徐々に増やしていくとよいでしょう。初めは選択肢を与え、やがて修正案や代替案を考えさせる。最終的には自分たちの学習目標や方法を全て決めるよう仕向けます。これは日頃の学級活動でも実践されるべきであると考えます。

その際、教師の役割（teacher role）を意識することも重要です。単なる「知識教授者」ではなく、「自律支援者」（facilitator）でなくてはなりません。これには三つのモードがあります。階層的（教師が学習過程を方向づけ、重要な決定もする）、協同的（責任と権限を共有し、多様なやり方を奨励して自律を促す）、自律的（全て生徒たちの判断に委ねる）モードです。意欲の維持には、これら三つの使い分けが重要です。

※3 本多敏幸先生から教わった活動です。『到達目標に向けての指導と評価』（教育出版）参照。

※4 グループによる協同的リーディング活動。班員に異なる英文を読ませ、担当箇所を説明させたり、異なる情報を見つけさせたりします。

※5 自己決定理論がこのことを強調しています。本誌2ページを参照。

3 意欲を**発展**させる段階 (ポジティブな自己イメージの促進)

最後は、英語使用者としての生徒のポジティブな自己イメージを高め、意欲を発展させる段階です。ここでは、教師によるフィードバック(FB)が重要な役割を果たします。ポジティブなFBによって高められた生徒たちの自己効力感、後に直面する困難に立ち向かう意志と粘り強さを強化します。

FBの際には、何を対象として行うかが大切です。学習者の「能力」ではなく、「努力」に焦点を当てたコメントを、さらに、パフォーマンスや個人特性に言及するのではなく、生徒の学習の「進歩」を評価し、それを「支援」するコメントを心掛けることが大切です。

Strategy 8

努力要因に着目したフィードバック

多くの人が、過去の失敗経験を語る時、「能力」の問題にしがちです(「自分には言語の才能がない」など)。しかし、能力のせいにするのは、何も利益をもたらしません。一方、「努力」の足りなさを意識する人は、「もっと頑張る」という建設的な意志を抱くことができます。故に、教師は努力要因に焦点を当てたFBを与えることが大切です。

Methods

- 失敗は努力と学習方略知識の不足のせいであり、能力不足のためではないことを強調する
- 教師の個人的な努力経験をシェアし、類似経験を生徒から引き出す
- 成功者の伝記を読ませ、適用可能な要因を語り合う

教室実践例

努力帰属にまつわるエピソード。私の学校では、朝礼前の10分間は単語集を用いた朝学習の時間。5分で20語を覚えてテスト。担任は結果を記録します。毎朝高得点を狙おうとすれば、予習が必要です。そこで私は、毎週際立つ努力を示した生徒を学級新聞でたたえることにしました。ある月、女子生徒Mがその週のトップに輝きました。Mは暗記が苦手で成績不良が続いていましたが、偶然普段より早く登校した日があり、やることのないため単語の勉強を始めたのです。すると、その日は初の好成績。私は宿題ノートの余白に、その日のMの自主性と努力についてつづりました。それから、事あるごとにMの努力に焦点を当ててコメントを書きました。Mが徐々に意欲を高めていったある日、隣の席の生徒から「最近始業前から頑張っているね、刺激になるよ」と褒めてもらったそうです。この努力承認がMの心に火を付け、ついに朝学習のトップに輝いたのでした。当然、私は学級新聞に彼女の努力の軌跡を書きつづり、激賞。それを読んだお母さまは喜びで感涙。以来、Mの家では居間に記事が飾られ、事あるごとに娘の努力を家族でたたえるようになったのだそうです。その後、Mが突出した努力の人となったわけではありませんでしたが、朝学習だけは最後まで頑張りが続けたことができたのでした。

Strategy 9

ポジティブな情報フィードバック

FBには、二つの区別があります。情報FB(進歩を適切に支援するFB)と管理型FB(外的基準に照らして生徒のパフォーマンスを判断するFB)です。例えば、ある生徒がテストで低い点数を取ったとき、クラス平均と比較して他者との差を強調し、努力の必要性を説くようなコメントは管理型と呼ばれます。一方、その生徒の以前の成果と比較して、長所と短所を明らかにし、客観的に進歩を後押しする助言は情報FBと分類されます。教師が生徒の進歩をモニターし、転機となる出来事を見つけたときには、学級通信や掲示物のような可視化できる物を作って紹介したりなどと、生徒の充足感が高まり、学習意欲の発展に好影響を与えます。

Methods

- 生徒の進歩の過程と集中すべき事柄に対してコメントを与える
- 生徒の進歩を可視化する
- 素早いFBを心掛ける(タイミング)
- 簡単な課題で褒めない(自尊心が低くなり逆効果になることも)

教室実践例

情報FBの心構えとして、次のことを意識しておきましょう。FBとは生徒に対する「教師の期待」を伝える手段であるということです。故に、われわれがFBを与える際には「期待の焦点」を明確にすることが大切です。例えば、生徒がテストで良い点数を取った時、われわれが「今回は良かったね。その調子だぞ」と伝えたら、聞こえはいいかもしれませんが、何が良いのかが不明確で、生徒に我々の期待することを伝えることができません。「今回は、何度も復習を繰り返したことが結果に結び付いたね。その調子だぞ」とすれば、自分の努力の方向性は正しかったと認識し、自信を伸ばします。そして、さらに進歩するために改善点への助言を求めようになります。このように、FBの成果を高めるためには、日頃から「生徒をよく見る」ことが大切です。彼らの「性質」をつかみ、「期待の焦点」を明確にして助言することが教師の腕の見せどころと言っても過言ではありません。

MSを教室で活用してみよう

ゾルタン・ドルニエイ著 *Motivational Strategies in the Language Classroom*^{※6}には、35のMSが紹介されています。これらをタイプ別に分類すると、【1】教師の談話、【2】アクティビティー・デザイン、【3】フィードバックに分かれます。ある研究によると、日本の先生方は談話タイプのMSをよく用いる一方、アクティビティーやフィードバック系のMSを

あまり使わない傾向にあるようです。まず、さまざまなMSの存在を知り、可能な限り教室で活用してみることです。三つのMSの種別に照らして、自分の使用MSタイプを点検すると、強みと弱みが見えてきます。このようなMS使用を尺度とした批判的な振り返りの試みは、授業改善の確かな手掛かりをもたらします。また、意欲を高める授業の実現は、生徒一人一人の個性を引き出し、教師にも授業をする喜びと生徒たちへの愛をより大きなものにしてくれるはずです。

Messages for Japanese EFL teachers from Professor Zoltán Dörnyei

In order to develop a working knowledge of a foreign language, learners have to actively engage with the language and have to practice communication in it. This is a point that I believe most language teachers would agree with, but we should also remember that such an engagement is, by definition, a face-threatening task for the students: Because they only have a rather limited amount of language knowledge at their disposal, they constantly face the danger of committing mistakes and thus appearing incompetent in front of their peers. It is no wonder, therefore, that so many of our students feel highly anxious during language classes and, as a result, often decide to 'play it safe' by remaining passive or even completely silent. Accordingly, our job as language teachers is not only to teach the new material well but also to offer encouragement to our learners: We need to counter their natural tendency to disengage by finding ways of motivating them to participate in our lessons despite the obvious risks they will have to take in doing so. Luckily, there are many tried and tested tools on our hand to achieve this purpose – techniques that have usually been referred to as 'motivational strategies'. Research in educational psychology has proved that it is possible to motivate learners through such strategies, and in my book – *Motivational Strategies in the Language Classroom*^{※6} – I collected the techniques that I considered most useful for language teachers. It is a real honor that this magazine has decided to feature some of these strategies, and I am genuinely grateful to Rei Sensei for helping to introduce these techniques and to make them accessible to Japanese colleagues. It is the hope of both of us that this selection will serve as an inspiration for language teachers in Japan and that it will convince them that it is worth experimenting with new motivational techniques. In our own experience, both Rei Sensei and I have found that students appreciate the use of motivational strategies, since these methods can make the difficult process of acquiring a new language more interesting and less demanding for them. We have also observed that as students get more motivated, our task as teachers becomes easier and more fruitful. Therefore, I believe it is true to conclude that applying motivational strategies in a language classroom is potentially a win-win solution!



世界を読み解く英語リーディング

『アクティブ・リーディング Super』(学校専売品)

本記事の監修者である和田玲先生が、高校での指導経験を生かして作り上げた授業用テキストです。リーディング活動を起点に「英語で」学ぶ楽しさを実感させ、社会のために行動できる生徒を育む至極の1冊。採用特典のTeacher's Manualには、生徒の動機づけを高め、世界に対する視野を広げるための指導案や授業用プリントを網羅しています。

アルク学参シリーズのご紹介

※6 訳書は『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』(米山朝二・関昭典 訳、大修館書店)。